

## 特集 第24回関東支部同窓会・懇親会

— みんな、利き酒はあたったかえ？ —

2011年10月29日(土) 17:00~エンドレス  
 於：ホテル銀座 ラフィナート 松風の間/赤坂 祢保希



総会に引き続き開催された懇親会。

今年は、東北に高知、日本の誇る酒処（飲み処？）の美酒飲み比べ。震災復興を願ういごっそうの心意気で、例年以上に多くの方に参加いただきました。企画した26期としては、ほんとにありがたい思いでいっぱいです。少しだけですが、誌面をお借りして当日の熱気をおすそ分け。



橋本教頭先生の音頭で幕開け。

メインイベントは… **利き酒!**

今か今かと出番の待ちきれないお酒達。  
 東北・高知の美酒に地元の名産。



1~50期 総勢 何と130余名の大盛況!!

早速一献。  
 どうでしょう?



18期植松さんのCDを巡り、酒の肴に大攻防戦。福田大先輩と津軽拳（青森に伝わる伝統的じゃんけん）



見事勝ちぬいた強者達  
 (おめでとうございます。)



気心の知れた仲間、同じ学び舎で青春を過ごした先輩・後輩との楽しいひと時、つながりは時を超えて…。



酒の肴第二弾。  
東北・四国のご当地クイズ。  
各チーム優劣つかず…。  
酔っ払いと侮るなかれ。  
学芸 OB 恐るべし。  
景品はやはり酒！



クライマックス！  
利き酒の全貌が  
明らかに！

そしてフィナーレへ。



卒業50年を迎えた3期生へのお祝い。  
皆様とてもお元気です。



お目当て（記念品）のバームクーヘン  
片手に上機嫌。



最後の儀式。26期の幹事から27期へバトンタッチ。来年は25周年だよ～。 恒例のあさかぜ大合唱で大団円  
…かと思いきや、今宵はこれからが本番！ みんなまだまだ元気です（前のページに戻る）。



SPECIAL インタビュー

つとむ 作詩家の匠

作詩家 紺野あずさ氏 (6期)

同窓会関東支部が発足して25年目の節目に登場して戴いたのは、作詩家の紺野あずささん。上海列車事故を悼む歌「さよならは言わない」を作詩したいきさつや学芸時代のお話もたくさん伺いました。

◆作詩家を志したのは50歳!

でも詩はずっと書いていました。歌謡曲の作詞を始めたのは、実はとても遅いんです。でも詩を書き始めたのは、12歳ぐらいから。

〈紺野あずさ氏 PROFILE〉

本名：村岡(窪田)寿子  
生年月日：1946年5月12日(66歳)  
出身地：高知市桜馬場町(多分)  
出身校：小高坂小・城北中・高知学芸高校  
職業：作詩家  
「時雨の宿」で1997年の第30回日本作詩大賞最優秀新人賞を受賞。その後、藤田まさと賞などのグランプリをたて続けに4年連続で受賞。代表作は「よさこい鳴子踊り」(鳥羽一郎)、「別れて大和路」(美貴じゅん子)など。日本作詩家協会会員、日本童謡協会会員



電車の中で宿題を書いたことも!

17歳の時、詩人の高田敏子さんの「月曜日の詩集」に感銘を受け、感想文を出したところ、思いがけずお返事をいただいてから文通を続け、誘われて同人誌にも投稿するようになったのです。その1年ぐら以後、私の「秋の日には」という詩に作曲家の中田喜直先生が附曲し、その年の全国合唱コンクールの課題曲となったことがきっかけで、童謡も書き始めました。ところが、50歳になったときに、「歌謡曲が書きたい!」と急に俗っぽい心が芽生え(笑)、六本木にある作詞教室に入学。ちょうど義母の介護もあって通うのは大変でしたが、娘と息子の協力を得て、休むことなく、週に1回の宿題もなんとかこなしました。

◆「時雨の宿」で第30回日本作詩大賞最優秀新人賞を受賞

作詞教室は、とても勉強になりました。一般的に「詩」というのは「読む詩」なんです。ところ

が、歌詞は「聴く詞」。最初のころは、先生から「紺野さんの詩は読む詩なんだよ。ことばで考えているだろう。でも、うたは心なんだよ、気持ちなんだよ」と、よく指摘されました。私としては、気持ちを書いていてもいいから、歌謡詞はその気持ちをもつ



1999年、「よさこい鳴子踊り」も最優秀賞を受賞。レコーディングのときの鳥羽一郎さん(中央)と作曲の岡千秋さん(右)とあずささん。<高知新聞掲載>



藤田まさと賞 受賞盾  
日本作詩大賞最優秀新人賞の盾は大事にしまいすぎて行方不明に(笑)。



4つもグランプリを受賞する快挙!  
そのCD4枚(時雨の宿、他)。

と具体的に、本音をことばにして温かみ(すくい)のあるものに仕上げなくちゃいけないですよ。そんな先生方のアドバイスもあり、週に1回の作詞の宿題でも鍛えられたおかげでしょうか。なんと、翌年の暮れに、「時雨の宿」で第30回日本作詩大賞最優秀新人賞を受賞。25000から26000篇ぐらいの応募作から、最終的に作詞家の星野哲郎先生とレコード会社の方が推してくださって、私の作品に決まったようです。運がよかつたんじゃないですか(笑)。

◆作詞するときには集中するので目玉を動かすのもイヤ(笑)

作詞にはストーリーが必要で、まず詞の主人公となる人物像を形作ります。生まれ育った場所や部屋、食べ物の好みや趣味まで考えます。これを骨格として、気持ちをもとめていくんです。この背景づくりがきちんとできていないと、歌詞の1番から3番で違う人格になったり、辻褄が合わなくなる。この骨格作りは作詞を始めて2年目ぐらいから身についたことで